

学会彙報

○昭和五十五年 大塚漢文学会大会 六月二十八日(土)

於 豊島区民センター

〔研究発表会〕

- 一、「古今小説」の古と今 筑波大学大学院 小松 建男氏
- 一、現代漢語の介詞構造と連動式 筑波大学大学院 大塚 秀明氏
- 一、革命文学論争から国防文学論戦への連続性について 都立大学大学院 広野 行雄氏
- 一、駱賓王の文学について 法政大学 安藤 信広氏
- 一、韋応物の文学 函館大学 松本 肇氏
- 一、五十七年度指導要領と漢文教材 福生高校 町田 静隆氏
- 一、漢文教育の問題点 市ヶ尾高校 宮本 佳昭氏
- 一、陶淵明と「列子」 国学院大学 中野 達氏
- 一、春秋の曆法に就法に就いての試論 大東文化大学 小嶋政雄氏

〔総会〕 司会 内山委員

- 一、議長選出 千原 勝美氏
- 二、委員長挨拶 加賀 委員長
- 三、諸報告
- (1) 庶務 横山 委員
- (2) 企画 高橋 委員
- (3) 編集 伊藤 委員

四、議事

- (1) 昭和五十四年度決算
- (2) 会則変更
- (3) 昭和五十五年度予算

中村(俊)委員

中村(俊)委員

編 校 後 記

ともあれ、八中国文化ノ第二号を出すことが出来たが、雑誌の厚味は創刊号より大分薄くなってしまった。

そうになった理由の第一は、応募原稿が少なかったことだ。締切日までに集まった原稿は四本。そのうち、近現代文学の原稿一本は、とても残念だったが、レフリーの意見もあつて、遂に掲載を断念した。応募して下さった会員には失礼になったかも知れないが、意のある所は理解して頂けたと信じている。

勿論、原稿依頼をもっと熱心にやれば、論文は集まっただろうが、それをしなかったのは、やはり、会の財政を考えざるを得なかったからである。この厚さでも、なお印刷費のかんりの部分は今年これから集まる会費に期待する外ない。理由の第二である。

その代り、漢文教育の座談会には前号よりゆっくりスペースを取ったし、八資料ノとして、東京都教育庁で作られた報告書の一部を掲載することも出来た(早く掲載を許可して下さい都の教育庁指導部に心から御礼を申し上げます)。

財政上の理由で潰れるのはやむを得ないが、内容的に潰れるようなことだけはしたくない。教育・研究、両面にわたって、次号にはご奮起ご投稿を切にお願い申し上げます。

(伊藤)

大塚漢文学会々則

- 一、本会は大塚漢文学会と称する。
- 二、本会は漢文学及び漢文教育の研究と普及とを図ることを目的とする。
- 三、本会の会員は左の通りである。
 - 1、旧東京教育大学漢文学会々員であつて参加を希望する者
 - 2、その他入会を希望する者
- 四、本会の主な事業は左の通りである。
 - 1、総会 年一回
 - 2、例会 年約三回
 - 3、学会誌及び会員名簿の発行
 - 4、その他必要な事項
- 五、本会の役員は左の通りである。
 - 1、委員長 一名
 - 2、委員 若干名
 - 3、編集委員 若干名
- 六、役員の任務
 - 1、委員長は本会を代表し委員とともに運営にあたる。
 - 2、委員は本会の庶務・会計・企画を分担する。
 - 3、編集委員は学会誌の発行にあたる。
- 七、役員の選出及び任期
 - 1、委員長は委員の互選による。
 - 2、委員は会員の互選による。
 - 3、委員会が必要に応じて委員を委嘱することができる。
 - 4、編集委員は委員会が委嘱する。
 - 5、任期は二年とするただし重任は差し支えない。
- 八、会員は会費年額二千円を納める。
- 九、本会々則の変更は委員会の審議を経て総会出席者の過半数の

承認を得なければならない。

附則 1、本会は昭和五十四年六月二十三日より東京教育大学漢文学会々則に代つて発効する。

2、本会の事務所を当分の間筑波大学文芸言語学系中国文学研究室に置く。

編集委員(委嘱)

(哲学・思想) 小林 信明・加賀 栄治・水沢 利忠
 (文学・語学) 鈴木 修次・内山 知也・松本 昭・伊藤 虎丸
 (漢文教育) 鎌田 正・金子 泰三・田部井文雄
 学会委員会

(長) 加賀栄治(副・総務) 横山伊勢雄(文書) 安藤信広・中山至(発送) 向島成美・中村嘉弘・加藤敏(会計) 中村俊也・間嶋潤一・堀池信夫(企画) 高橋均・若林力(会報編集) 内山知也・伊藤虎丸・佐治俊彦・小谷一郎・阿川修三・小松建男

漢文学会会報第三十九号 昭和五十六年六月二〇日印刷
 昭和五十六年六月二七日発行

大塚漢文学会

編輯者

伊藤 虎丸
 内山 知也
 佐治 俊彦

印刷所

東京都千代田区神田神保町三ノ一〇
 株式会社 共立社印刷所
 電話 (261) 二〇二八

茨城県新治郡桜村

筑波大学文芸言語学系内(二三〇五)

発行所

大塚漢文学会